

急性期病院の看護師が持ちたい“つなげる視点”

第12回東邦看護学会学術集会会長 寺口 恵子
(東邦大学医療センター佐倉病院)

わが国における高齢化率は23.3%(2011年)に達し、本格的な超高齢社会に突入している。今年(2012年)には、団塊の世代がはじめて65歳に達し、今後、高齢化がより加速していくことが予想されている。

今から約80年前、結核をはじめとした感染症が猛威を振っていた時代、疾病の構造は急性疾患を中心としていた。当時医療に求められていた役割は、命を救うための治療法の発見であった。反面、高齢化が進み生活環境が大きく変化した現在では、生活習慣病や認知症といった慢性疾患への取り組みが、大きな社会的課題となってきている。

生活習慣病や認知症、老化による身体機能の低下は、これらの疾患や老化とうまく付き合いながら、いかに自分らしく人生を生きるか、その生活の質(QOL)が重要視される時代となっている。このような個々の患者のニーズにきめ細やかに対応するためにも、医療・福祉・介護の強固な連携体制を構築し、様々な面から包括的に患者をサポートすることが求められている。

医療提供体制の面からみても、従来の「病院完結型(自己完結型)医療」のみで増え続ける高齢者の医療を支えることは困難な状況にある。地域の限られた医療資源を有効活用し、質の高い医療を実現するためには、地域内で医療が完結できるシステム「地域完結型医療」の構築が必要であり、地域の医療機関が機能分化・連携を図り、地域全体で切れ目なく必要な医療を提供する体制を整備することが重要である。



2012年、診療報酬・介護報酬が同時改定され、厚生労働省から「患者のニーズに応じた病院・病床機能の役割分担や医療機関相互あるいは医療と介護間の連携を通じて、より効果的・効率的な医療・介護サービス提供体制を構築する」という明確な方向性が打ち出された。

昨今は平均在院日数が短縮し、医療が病院から在宅にシフトし、医療依存度が高く、退院後も治療の継続や療養支援が必要な方が多くなっており、退院時における継続看護については、病院看護師と訪問看護師の関わりが重要で、本人の望む療養生活が送れるか否かは、病院・在宅双方の看護師がどのような役割を果たすかがカギとなっている。

看・看連携を主軸とした退院調整・支援の課題やシステム化などの検討が急務であり、急性期病院の看護師には今まで以上に“つなげる視点”を持って看護を提供することが求められている。

特別講演の座長を終えて

—地域社会の中で看護が大規模なネットワーク形成にチャレンジすること—

東邦大学看護学部
近藤 麻理



今年の学術集会では、高齢者の孤独死や介護保険制度など社会福祉学の専門家である結城康博先生（淑徳大学准教授）にご講演いただきました。

介護サービスとは、福祉にビジネスが入り込んでいるため、“金儲け”と“福祉”が良いバランスを維持しないと継続は困難になる。そして、市場原理の中でサービス付き高齢者住宅などは、今後も異業種の参入が盛んになると予測されている。我々は、異業種参入を排除するのではなく、提供されるサービスの質を冷静に評価しながら、高齢社会に適応できる産業構造の転換の具体策と、看護はそこにどう関わるのかを考えなければならぬ。

看護の可能性としては、病院で勤務している看護職が、地域の看護職と日頃から顔の見える関係をしっか

りとつくり、看護のネットワーク形成と連携を地域社会の中で強めることであると理解できた。そして、看護職が、社会保障政策の仕組みや経済を理解し、今後の日本の保健・医療・福祉を豊かなものとするために、新たな「看護」にチャレンジする時がまさに今来ているのだと気づかされた。

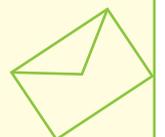


シンポジウム「シームレスな在宅療養に向けて ～患者・家族の思いをつなぐ～」を終えて

東邦大学医療センター佐倉病院
前田 富士子

4名のシンポジストにお話しを頂いた。中山洋一氏は、ご家族を介護した経験から問題提起をされ、医師の大津秀一氏は、患者の思いを引き出すコミュニケーション力、今後の見通しを先んじて予測する力、患者・家族と医療者ですれ違う思いの調整力が看護師には求められていると熱く語られた。福田裕子氏は地域の中での看護師の役割と退院前からの看護師間の連携の重要性について、角川由香氏は、患者の思いを引き

出し、病気や障害と折り合いをつけながら生活をしていく患者を支えていくことは看護の醍醐味であると話された。患者の入院が決まった時から一日も早く退院できるように、治療・看護に取り組むことは大切な退院支援である。更に患者・家族の思いを確認し、生活者としての視点を持ちながら必要な支援を継続させていくことが急性期の看護師には求められているといえる。まずは、目の前の患者にもっと関心を持つことで、支援すべきことが見えてくるのではないかと。看護師に向けての熱いエールに力を頂いたシンポジウムであった。



2012年度 東邦看護学会研究奨励金および学術集会賞受賞者

2012年度東邦看護学会研究奨励金、第12回東邦看護学会学術集会賞として下記の方が受賞されました。

第12回 東邦看護学会学術集会賞受賞者

テーマ 整形外科病棟における術後せん妄ケアに対するスタッフの意識の変化
～せん妄アセスメントツールの活用を通して～

宮本 むつみ 東邦大学医療センター大森病院

テーマ 退院支援に対する看護師の意識と退院指導の変化
～退院支援カンファレンスを導入して～

阿部 光子 東邦大学医療センター大森病院
清岡 沙友里 東邦大学医療センター大森病院
石川 絵梨 東邦大学医療センター大森病院
吉田 由美 東邦大学医療センター大森病院



2012年度 東邦看護学会研究奨励金受賞者

テーマ 産褥早期の母親の疲労感と唾液コルチゾールとの関連

山崎 圭子 東邦大学看護学部

テーマ 人工呼吸器関連肺炎予防に向けたポジショニングの検討

久保 亜希子 東邦大学医療センター大森病院



学生発表コーナー (示説会場)

今回は学生コーナーも設けられました。

東邦大学看護学部看護看護学科 4年次学生 7示説
東邦大学佐倉看護専門学校 3年次学生 5示説



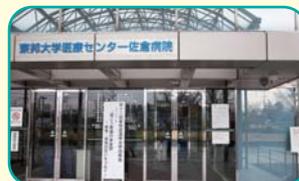
第12回東邦看護学会学術集会を終えて

東邦大学佐倉看護専門学校校長
拜原 優子

昨年12月15日、小雨まじりの中、東邦大学医療センター佐倉病院において「描こう看護の未来 患者・家族の思いをつなぐ」をメインテーマに掲げ第12回東邦看護学会が開催された。大森・大橋両病院は貸し切りバスをチャーターして参加し、参加者数は過去最高の592名を数え、30題の研究発表と大会長講演、特別講演、シンポジウムが行われた。さらに今回からの試みとして看護学部生、佐倉看護専門学校生による研究発表(示説)が加わり、初の佐倉地区での開催、初の病院での開催など初めてづくしの学会となった。



寺口恵子大会長講演、結城康博淑徳大学准教授の特別講演では、超高齢化社会を迎え首都圏の急性期病院が抱える問題と医療・看護が果たすべき役割についての提言がなされ、シンポジウムでは、家族、医師、訪問看護師、退院支援看護師それぞれの立場から退院支援について発言していただき、急性期病院における退院支援の難しさ、問題点が浮き彫りになった。入院中からその方が戻る生活に焦点をあてた看護をすることこそ一人ひとりができる退院支援であることを再確認した学術集会であった。



機関リポジトリをご存じですか？

東邦看護学会誌編集委員長 **出野 慶子**

皆様、「機関リポジトリ」という言葉をご存じですか？これは研究成果を無償で利用できるインターネット上のデータベースのことです。昨年12月より本学会誌(第9号)は機関リポジトリに登録され、発刊後6か月から誰でもアクセス可能であり、文章改変とコピーは不可、印刷可の制限つきです。これにより、研究成果は広く一般に知られるようになりますが、同時に研究内容や倫理面について厳しいご意見も寄せられることが考えられます。編集委員会としては、学会誌が看護実践・教育により貢献できるように編集作業を進めていきたいと考えております。

会員管理システムの導入について

東邦大学法人本部看護企画室室長 **出射 明子**

会員管理を一元化してスピーディーに対処するために、2013年度からシステムを導入しました。これに伴い、会員の皆様には今年度新たに会員番号をお渡ししました。学術集会への参加や投稿する際に必要となりますので大切に保管しておいて下さい。なお、平成25年度からは会費納入は個人で銀行振り込みをすることになります。お手数かとは思いますが、東邦看護学会の発展のためにスピーディーなお振り込みにご協力ください。



「研究に関するよろず相談サロン」を開催して

東邦看護学会研究活動支援委員長 **福田 美和子**

第12回東邦看護学会学術集会において、①研究全般に関する個別相談、②研究に活用できそうな参考図書の見出し販売などを行いました。個別相談では、次年度着手予定の研究疑問の絞り込みや文献検索に向けたキーワード抽出などを一緒に行いました。今後も学術集会において相談サロンを設ける予定にしています。研究テーマを見つけることや学会誌への投稿方法の相談など個別対応いたしますので、ぜひご利用ください。

第13回東邦看護学術集会に向けて

東邦大学看護学部 **遠藤 英子**



平成37年には後期高齢者は人口の3割を占め、医療・福祉の現場はその現状に対応せざるを得ません。第12回の学術集会はこのような社会の変化を捉え、急性期医療を提供する病院と地域との看護の連携をテーマに行われました。第13回はこの連携を図るための看護実践力とは何か、その実践力を持つための看護基礎教育のあり方と臨床現場との連携をどのように行ったら良いのか、という継続教育のあり方をも考える機会にしたいと思います。

..... 「ニュースレター18号」に関するお詫びと訂正

お名前に一部誤りがありました。謹んでお詫びさせていただくとともに下記のように訂正をさせていただきます。よろしくご理解の程、お願い致します。

 鈴木明由美
小笠原典子

 訂正 鈴木明由実
小笠原法子

NEWS LETTER

ニュースレター事務局

〒143-0015 東京都大田区大森西 4-16-20

TEL 03-3762-9881
FAX 03-3766-3914